



## タンザニア漫遊記（その2）

山田 章雄

（前号からの続き）

### 月下のシャワーとライオン

クブクブロッジは野生生物の棲息地のど真ん中。チェックイン時に「フェンスもないので暗いうちは部屋から出ないように」と注意された。我々のロッジはダイニングのあるメインビルディングと目と鼻の先にもかかわらず、ディナーでメインビルディングに行く際は、マサイ族戦士のエスコートを電話で依頼する必要がある。長身の彼らは手に槍を持ち我々を迎えてくれる。なんだかライオンキングにでもなったような気分だ。

このロッジはフリードリンク制なので、ついつい飲みすぎる。美味しい料理で、地ビール、シャンパン、南アフリカ産赤ワインを堪能していると、数人のスタッフが踊りながら、何やら楽しそうに運んでくる。どうやらバースデイケーキらしい。かみさんの誕生日は3日目だったけど、アントニーが気を利かせてくれたのかなどと想像していると、ケーキは隣の席の女性のところへと運ばれて行った。日本人のグループだったので祝いをしたところ、おそらくあずかれた。マサイ戦士のエスコートで部屋に戻り、シャワーを浴びてベッドに入ることにする。特筆はシャワールームだ。頑丈な

ドアを開けると石で組まれた露天シャワーなのだ（写真3）。ちょうど月の美しい晩だったので、若干の肌寒さもなんのその、月下のシャワーを満喫した。

時差ボケもなく深い眠りに落ちることはできたが、年のせいもあり必ず夜中に目が覚めるのは致し方ない。しかしその晩は違った。一瞬かみさんの鼾で目が覚めたのかと思ったが、耳を澄ますと何某かが唸っているのである。低く不気味な身も凍るような声だ。ライオンだ。後で知ったことだが、昼間はダラダラしているだけの雄ライオンは縄張りの点検のために、夜通し歩き回るらしい。その折に発する唸り声を聞いていたのだった。

### 「あきお」はここでは著名人

クブクブロッジ2晩目のディナーの時である。ヴェロニカという女性シェフがメイン料理の説明に来た際、アントニーがにやにやしながら、「お前の名前を彼女に言ってみろ」という。「あきお」だと答えると、ヴェロニカがけらけらと笑い出した。人の名前を笑うとはけしからんではないかと気色ばんだところ、アントニーが説明してくれた。タンザニアは125の民族から構成される多民族国家だが、そのひとつがメルー山に住

む「あきお」だというのだ。スペルを訪ねると人によってまちまちで、それをググっても該当する記事は見つからなかった。しかし、Wikipediaでタンザニアの「Ethnic group」を調べてみると「Akie」という部族がアルーシャ近辺にいることが分かった。おそらくスワヒリ語での発音が「あきお」に近いのだろう。私の名前はタンザニア人には極めて覚えやすく、親しみがあるらしい。かくして私はロッジのスタッフから好奇のまなざしとともに、「Hi, Akio」と呼びかけられる存在となったのである。

### 落とし穴

国立公園の多くは道路から外れることが許されていないのだが、



写真3

セレンゲティ国立公園の南に接するヌデウトゥ地域はメインの道路だけでなくサバンナの好きな所を車で走行できるので、動物の写真撮影に最高の場所である。ただ数日前の大雨であちこちにぬかるみがあり、スタックしないように慎重に運転する必要がある。ベテランドライバーのゲイタンはスタックしている車を尻目にすいすいと車を走らせていく。残念なことにこの環境だと、一度車を停車させるとぬかるみから脱出できなくなるので、ブチハイエナが道端で寝ていても停車できない。そのうち湿地状態だった部分を脱し、スタックの心配もなくなった。チータを探して、サバンナの進撃を開始する。しばらく走り回ったその時、ものすごい衝撃に襲われた。死ぬかとまでは思わなかったものの事態の深刻さはすぐに理解できた。何と右後輪が大きな穴に落ちているではないか。車体が地面に接触している。ゲイタンはひたすら謝りながらも落ち着き払っている。このままチータの餌食になるのではないかと恐怖にかられる我々を意にも介さず、無線で救援を求めた。10分ほど前にすれ違ったサファリカーが数分で駆けつけてくれた。ワイヤーロープで双方のサファリカーをつなぎ、引っ張り上げる作戦のようだ。ただ、ワイヤーが錆だらけなのが気にかかる。アントニーの合図で救援の車がわれらの車を引っ張り始めたが、その瞬間ワイヤーロープがブチッという音とともに見事に断裂したのであった。絶望という文字がちらつき始めたが、そこはサバンナで何年もこの商売をしてきた強者ど

も。ロープを素手でしばりつけ、先ほどとは逆方向に牽引を開始した。ワイヤーがぴんと張り詰め、我々の緊張もぴんと張りつめた。救援のランクルのディーゼルエンジンが唸り、廃棄ガスを吐き出しながら、我々のランクルを引き上げようと懸命になる。見事な連携で救出作戦は成功裏に終わった。車へのダメージもなく、怪我人もおらず、われらの冒険は続くことになった（写真4）。

### マサイの村のトイレ

ツェツエバエに刺されたせいではないだろうが、腹の調子が良くない。腹痛も吐き気もないがトイレに頻繁に誘われる。多分暴飲暴食が原因だろう。ただし、サバンナで催した場合はショットした悲劇だ。水分の方は他のサファリカーがいない時に車の後ろに回り込んで、車体の陰ですませばよい。アントニー以外の3人は度々この方法で用を足してきた。しかし大のほうはそうもいかない。草の陰ですますことは命の危険を伴うし、メインロードにティッシュや痕跡を残すわけにもいかない。アントニーとゲイタンも気遣ってくれ、できるだけトイレのある所で止めてくれると約束してくれた。若干の不安もあったがともかく出発することにした。ンゴロンゴロクレーターに向かう途上、マサイの村を訪問するのだ。これは一種の観光イベントで、100ドル払えば村中の男女が歓迎の

ダンスを披露してくれ、さらに彼らの住居の中の見学と村内の案内をしてくれる（写真5）。牛の糞を塗って作った小さな小屋の中は一応ベッドルーム、キッチン、子供部屋というように用途別になっているとのことだが、全体で多分6-8畳程しかなく、極めて質素だ。水は雨水あるいは池や、川の水を備蓄する貯水場があり、薬剤を投入して浄水するらしい。土産物のディスプレイも準備されている。酋長の息子の医学生がマサイの生活について説明してくれた。住居のはずれにキンダーガーデンがあり、20人くらいの子供たちが歓迎してくれ、英語の授業の一端を見学した。キンダーガーデンを終えた子供のうち、酋長が決めた子たちだけが地域の小学校に通って勉強を続けられるらしいが、選に漏れた子供たちは、家畜の世話役になり、どうやら進学は断念しなければならないらしい。伝統とは言うものの、マサイの女性や、子供たちは今の我々の感覚からは程遠い権利剥奪をされている。土産物も空港よりも遙かに高額で売られているのだが、寄付だと思って気に入った2点を購入した。2時間ほどのツアーを終了したころ、俄かに催してきた。見るとマサイの石造りトイレが目に入った。ア



写真4

ントニーとゲイタンはおすすめしないという。しかしこれは緊急事態なのだ。先ほどの医学生に使用を打診すると、「大丈夫だ」という。ゲイタンが手渡してくれたロールペーパーを手に、ドアの閉まらない不潔とまでは言えないが、居心地は決して良くない廁で用を済ますことができた。ほかの選択肢はなかったのである。

### ツェツエバエ

あちこちが湿地状態になっていてマラリアを媒介するハマダラカが気になっていたのだが、ほとんど見かけないし、蚊らしきものには刺された記憶がない。多分季節外れの大雨で、蚊が産卵したとしても流されてしまうのだろうと、アントニーが説明してくれた。しかし、車中で、忌避剤を塗りまくっていたはずの足を何かが刺した。サファリカーの中では座席に立って観察することが多い。土足厳禁なので、サンダル履きが便利だ。それが次の落とし穴だった。靴を履くからということで、足の甲にはあまり丹念に忌避剤を塗つていなかったのである。その後も観察や撮影をしているすきを見て奴らは足に食らいつく。ツェツエバエはアフリカ睡眠病の原因になるトリパノソーマを媒介する。ただ、この地のハエからは病原体は駆逐できたそうだ。病気になる心配はなくなったが、刺された瞬間は痛い。しかし数分もたつとかゆみも痛みも消失する。ところが帰国時の飛行機の中で突然足が痒くなった。機内で蚊にでも刺されたかと思ったが、どうやらこれはツェツエバエの刺咬跡がぶり返

したようだ。猛烈な痒みと発赤は帰国後数日間続くことになった。恐るべきツェツエバエである。多くの人間たちがンゴロンゴロで牧畜を始めようと試みたらしいが、この虫のせいで断念したそう

だ。また、この虫たちが餌となりこの地の生態系の維持に貢献しているということで、殺虫剤による駆除は行われていないらしい。不妊化させる薬剤をしみこませたハエの好きな紫色の旗でおびき寄せ、個体数を減らすような対策を行っているらしい。

### 旅の成果

10日間の旅でなんと304種の鳥たちと出会うことができた。そのうち262種の写真を撮ることができたし、264種はかみさんにとって初めて出会う鳥だった（私にとっては231種）。42種の哺乳類と4種の爬虫類にも出会うことができた。レストランの床を這うサソリまで観察できた。サファリで大型動物だけを標的にすると、キリン、シマウマ、ヌー、などはもちろん、ゾウやカバやライオンでさえ、あちこちで会えるため、だんだんチータやヒョウのような希少な動物の出現を期待するようになる。サファリカーは無線でコミュニケーションをとるため、誰かが見つければ大体これらの動物にも会えるのだが、結構な時間待たなければならない。時間つぶしに歩くこともままならないので、皆



写真 5

さんどのように時間を過ごしているのだろうか。それに対してバーダーであれば大型動物は無線連絡を待っているだけよく、その間じっくりバーディングを楽しめる。即ちサファリはバーダーにとってまさに極楽であり、バーダーならサファリを10倍も、100倍も楽しむことができるのである。

当初かすかに抱いていたアフリカへの不安などあつという間にどこかへ行ってしまった。それどころか、気づけば、ラグビーではないが俄かアフリカファンになっていた。タンザニアの人々は明るく親切で、環境問題にも真剣である。タンザニアを訪れる観光客はスーパーのレジ袋を持ち込むことが禁じられた。ペットボトルも徐々に瓶に変えていくそうである。食べ物も美味しいし、ビールも種類が多く、味も良い。南アフリカ産の赤ワインもいけるし、お勧めできる国の一つであることは間違いない。

(日動協ホームページ、LABIO21カラーの資料の欄を参照)